『現代民俗学研究』第 9 号（2017 年 3 月）
Journal of Living Folklore 9（Mar. 2017）

現代民俗誌への模索と課題

―『高砂市史』における試みから―

川 森 博 司 *
KAWAMORI Hiroshi

In Search of the Ethnography of Contemporary Japan

An Example from *the History of Takasago City*

How can we describe civil lives in contemporary Japan? This paper examines issues in "contemporary ethnography" based on regional research from a folkloristic point of view. Much regional research including folkloristic studies has been undertaken on municipal basis in postwar Japan, but in many cases we have fragmentary descriptions of peculiar folkloristic matters. The concept of "folklore" in Japanese folklore studies tends to restrict our research only to the survival of an old age. To break the deadlock, I analyze my own description of "folklore" in Takasago City, Hyogo Prefecture, and struggle to find a new perspective on the ethnography of contemporary societies. The point is how to delineate the conditions of modernity against which we lead our lives. I introduced the three concepts of Anthony Giddens: "separation of time and space," "disembedding," and "reflexivity," and explore the dynamic aspects of everyday lives. We should revise the conventional method of Japanese folklore studies to properly describe these aspects, and should write "contemporary ethnography" to respond to the needs of people to improve matters in hand and to envision prospects for the future.

キーワード : 現代民俗誌　モダニティ　脱埋め込み　再帰性　臨海工業都市

* 神戸女子大学文学部

Copyright © 2017 by The Society of Living Folklore

はじめに―『高砂市史』の成り立ち

本稿では、2016（平成 28）年 1 月に刊行された『高砂市史　第七巻』（別編　文化財・民俗）の中で私が執筆した「第四章　民俗」を材料にして、現代日本社会の「民俗誌」をどのように作ろうとしたのか、そして、現実にどのようなものができたのか、そこから実感を込めて見えてきたものは何か、などについて考察してみることにしたい。

『高砂市史』全 7 巻は、兵庫県高砂市の依頼によって日本史学関係の大学教員が中心となった高砂市史編さん専門委員会（計 7 名）が 1999 年に組織され、その後 16 年の歳月をかけて刊行が完結したものである。筆者自身は 2007 年より特別執筆者に加わり、「民俗」の部を執筆するための調査を開始した。以後、断続的に試行錯誤的な調査を継続して、2014 年 8 月に第一稿をまとめ、2016 年 1 月、足掛け 10 年目に刊行に至った。その間の紆余曲折、そして、どのような構成をとることにしたのか、どのような問題に直面したのか、そして、現代民俗誌の可能性がどのように見えてきたのか、ということを考察の対象にしたい。

『高砂市史』の第 1 巻から第 6 巻までは、後の歴史的考察および記述のための資料提供を目的とする「史料編」3 巻と、史料をもとにした考察にもとづいて高砂市の歴史を時代ごとに記述した「通史編」3 巻に分けられており、資料集と通史的歴史記述の 2 段階の構成になっている。しかし、私が執筆した第 7 巻には、そのような 2 段階の組み立ては採用されていない。「第一章　石造遺物」「第二章　建築」「第三章　美術」は、基本的に「資料集」としての記述になっていて、編さん専門委員会の構想においては、「第四章　民俗」にも「民俗資料集」的なものが期待されていたと想定される（特別執筆者は編さん専門委員ではないので、編さん専門委員会の会議の実際は直接にはわからないが）。これは、現代の日本社会において民俗学に期待するものが、今でも相変わらず珍しい「民俗」の報告であるという状況を反映しているものと思われる[(1)]。

しかし、編さん専門委員会委員長の今井修平氏（日本近世史）が、川森の特色を出して自由に書いてよいという枠組みを提示されたので、私としては現代日本の、ある意味で「中途半端」な、つまり、近代化の大きな波に巻き込まれながらも前近代性をそちこちに残した地方都市の民俗誌を作成するという課題に挑戦してみようという気持ちになって、記述を進めていった。

1. 視点の設定

（1）全体を見る視点と対抗的文脈

私がまず前提にしたのは「一人の目で全体を見る」ということである。そして、「一人の視点から書く」ということである[(2)]。考古学の発掘報告書と違って、民俗資料集や民俗報告書が蓄積されても、それをもとにして、研究が展開していくという方向に現在はなっていない。そこで私は、「従来の自治体史の民俗編にしばしば見られる項目羅列的な記述ではなく、テーマ別の論述を行うことによって、『生きる方法としての民俗』を捉えていく」［川森 2016: 683］という方針をとった。

そして、全国的、あるいはグローバルな歴史の流れの展開が一方にあり、それに対して「複雑

な対抗的文脈」が各地で展開してきた、という見方を記述の基本とした。これはジェイムズ・クリフォードの「文化の生成」という側面に注目する見方を援用したものである。クリフォードは次のように述べている。

> 世界中で、先住民たちは「進歩」とか「国家」統一とかいう力に対峙しなければならなかった。その結果は、破壊的であると同時に創造的でもあった。多くの伝統、言語、価値観は失われてしまった。そのうちのいくつかは文字どおり殺戮された。しかし同時に、多くのことが、複雑な対抗的文脈において創造され、復活した。［クリフォード 2003: 30］

このような見方に触発されて、私は『高砂市史　第七巻』において、戦後日本の状況について次のように記述した。

> そこで起こったことは高度経済成長の展開であり、高砂市域の場合、それが臨海工業地帯の形成と展開という形であらわれた。その際に「多くの伝統、言語、宇宙論、価値観」が失われ、一般市民が従来の生活の延長線上で、ささやかであっても生きがいのある生活を送っていくことに多くの障害が生じるようになった。しかし一方で、その生きがたさを克服するために「多くのことが、複雑な対抗的文脈において創造され、復活」することによって、現在の文化的状況が形づくられていると考えられるのである。［川森 2016: 684］

高砂市においては、かつて海水浴場であったり、潮干狩の浜であったりした海岸に、大企業の工場が建設されていき、それによって住民の職業構成も変わり、その生活様式も変化していった。そのような状況の中で何を「民俗」として捉えるか、という問題が浮上することになる。

（2）何を「民俗」として捉えるか

現代日本において「民俗」という言葉に寄せられる一般的な意味づけは、専門分野としての民俗学における研究対象としての「民俗」との間に、かなりの齟齬がある。柳田国男が 1930 年代に確立した民俗学の枠組みや民俗の捉え方が戦後日本社会に定着したとはいえない状況なのである[(3)]。柳田国男の確立期の民俗学観を反映していると考えられる『民俗学辞典』の「序」において、柳田は「人が正しく且つ安らかに活きる為に、大よそ入用なものの全部を（この辞典の項目に）含んでよい」という考えを述べている［民俗学研究所編 1951: 2、カッコ内は引用者による補足］。また、「学問は疑問から、すなわち現実に打当って解かずには居られない生活上の疑問から、入って行くのが本筋だ」［民俗学研究所編 1951: 2］と述べている。柳田のこのような民俗の捉え方と学問の役割に関する考え方に準拠して、『高砂市史　第七巻』の「民俗」の章で取り上げる「民俗」について、私は次のように述べた。

> 現代社会を生きぬいていくためにはさまざまな工夫が必要である。そのために活用することができる「民俗」を筋道を立てて整理し、高砂市民をはじめとする読者諸氏が今後よりよき生活を組み立てていくための「内省」の契機として役立つ叙述を目ざすことにしたい。［川森 2016: 682-683］

具体的な構成としては、「生活の合理化と生きがいづくり」、「伝統行事と地域社会」、「郷土と民俗の再発見」という 3 つの軸を立てて、身の回りの事象である民俗を意識的に捉えなおす仕掛けを考えた。

まず、「生活の合理化と生きがいづくり」の節においては、葬式公営の展開、公民館の活動、高齢者大学の活動を取り上げた[(4)]。

次に「伝統行事と地域社会」の節では、その中に「高砂市域の年中行事」、「地蔵盆と高砂市民」、「秋祭りと高砂市民」の 3 つの項を立て、「とんど」などの年中行事、地蔵盆、屋台（ヤッサ）の巡行を中心とする秋祭りなどを取り上げて、高砂市民の伝統行事とのかかわりの特徴を全国的な視野のもとに位置づけることを試みた。

最後に「郷土と民俗の再発見」の節では、「郷土の再発見」と「新たな伝統の創造に向けて」の 2 つの項を立て、「郷土の再発見」においては「人物の顕彰」と「地元民による郷土史の作成」などを、「新たな伝統の創造に向けて」においては「新たなコミュニティづくり」やお寺の住職による版画仏の作成・配布などを取り上げた。

2. モダニティ（近代）の文脈

（1）時間軸の導入

福田アジオは「二〇世紀民俗学のこれから」という論考の中で「民俗学というのは現在のあり方を手がかりに、あるいは現在の事象を資料にして歴史的な世界を組み立てるのだ」［福田 2014: 10］と主張している。そのような方向に反して、『高砂市史』の「民俗」の章では、先に時間軸を提示して、それと対照させながら現在の事象の意味を考えていくという方向をとった。さまざまないきさつを経て「現代」という時代、そして「現代社会」が成立している。その経緯をときほぐして、われわれがどのような時代に生きているのかを認識するためには、時間軸を設定し、その中に民俗事象を置き戻して、その時代の生活のありようを想像力を通してじっくり味わうというプロセスが必要だと考えたからである。

第 2 節の「戦後高砂社会における生活の変容と民俗」が、その時間軸の提示に当たる[(5)]。そこでは、おもに市の広報誌にあたる『市政だより』のバックナンバーの読み解きをもとに、「昭和 30 年代」「昭和 40 年代」「昭和 50 年代」「昭和 60 年代から平成へ」の 4 つの時期に分けて、私なりの民俗学的な視点から記述をおこなった[(6)]。その例を挙げてみることにしたい。

昭和 30 年代に高砂市では、農業人口の減少が進み、本格的な工業都市への歩みが進められていった。『市政だより』の 1961（昭和 36）年 7 月 1 日号には「一九六〇年世界農林業センサス結果 No.2 ／専業農家一割足らず !! 」という見出しのもとに「工業化の波にのり、高砂市の農業も大きく変わりつつあります。（中略）専業農家というものが、全農家数のわずか一割足らずという姿は、工業都市高砂の性格をよく物語っています。昭和二五年すなわち十年前にも行われたこの調査の結果を調べてみますと、専業農家は二割五分もありました」という記事が載せられている。高砂町については戦前からすでに工業化の流れが顕著であったが、合併によって組み込まれた、かつての農村地域でも専業農家が大幅に減少してきたことを知ることができる記事として提示した［川森 2016: 691］。

昭和 40 年代の高砂市は、工業化がさらに進展するとともに、そのような産業発展中心のあり

方に対する見なおしの意識もめばえてきた。その状況をあらわすものとして『市政だより』1968 年 1 月 1 日号の「明るい豊かな郷土づくり／産業中心主義から／人間中心主義へ」という見出しの記事を取り上げた。そこでは、「現在の高砂市にとっては、無条件に企業を誘致する時代は過ぎ去り、今後は環境整備を行なうとともに各産業の均衡ある発展によって、豊かな郷土を建設する時期にきているといえましょう」と述べられ、「道路と橋を新設、拡充し産業発展と交通難解消」「都市に緑と空間を／各地に公園を建設」「下水道施設の整備と拡充」「新生児センター設置」「国づくり　街づくりのため／教育の充実を」「老人、母子家庭にも福音を」「公害をなくして／明るい街づくり」「近代的処理施設を建設」「宅地造成と住宅の建設」などの課題が列挙されている［川森 2016: 695］。1966 年に工場誘致条例が廃止され、代わって公害防止条例が定められたことに象徴されるように、昭和 40 年代には開発中心の流れを見直し、「新たな郷土づくり」といったテーマが浮上してきていることを示した。

昭和 50 年代には、高砂市の行政の側から「健康で、明るく生きがいのある都市づくり」（「高砂市基本構想」、1977 年）を掲げる施策が実施されていくことになる。たとえば、「共同学習やクラブ活動を通じて教養を深め、仲間を広め、生きがいのある日々をおくっていただくため」、高齢者大学講座が 1977 年に開かれたことなどが、その例である（『市政だより』1977 年 6 月 6 日号）。このあたりの動きは、当時の足立正夫市長（在職 1974-1994）が、都市化の進展によって「地域社会との一体感、郷土意識がうすれ、乾ききった人間関係、疎外感が広がって」いるとの認識のもとに、「新しいコミュニティづくり」という施策の必要性を主張していることと関連する（『市政だより』1978 年 1 月 1 日号）。否応なく急激な変化を遂げた戦後日本の地域社会において、従来のムラやマチ、家族・親族のつながりに頼るだけでは市民生活のやすらぎを得ることはできず、「新しいコミュニティづくり」が必要であるという提言は的を射ているように思われる。そして、このような状況に対して、それがどの程度、行政主導で推進できるのか、どのような形で民間の力が必要なのかといった問題を考えることが民俗学の課題であることを述べた。

昭和 60 年代から平成にかけての時代状況としては、ポスト産業社会（あるいはポストモダン社会）と呼ばれるあり方が高砂市においても進展していることを指摘した。『市政だより』三〇周年記念特集号（1984 年 7 月 1 日刊行）の「産業別人口／第三次産業がトップに」という記事には、1980 年の国勢調査の結果、高砂市の第 3 次産業（商業・運輸通信業・サービス業など）の人口比率が、第 1 次産業（農・林・水産業）はもちろん、第 2 次産業（鉱業・製造業・建設業）をも上回るようになったことが記されており、第 3 次産業が人口比率の最大部分を占める「消費社会」と呼ばれる状況に高砂市も突入してきたことを示している。この時代を特徴づけるのは、イギリスの社会学者ギデンズの言葉を借りれば「脱埋め込み」や「再帰性」と呼ばれる状況であるが、この点については、次の「モダニティと現代民俗誌」の項で具体的に検討することにしたい。

このように時代背景の記述を進めた第 2 節は、民俗学独自の方法論にもとづいて「民俗」を記述したものではないが、私としては「第四章　民俗」を構成する必須の部分と考えている。この部分がないと、章全体の記述が項目羅列的な流れになってしまうと考えるからである。しかし、この部分は、福田が言うように「現在の事象を資料にして歴史的な世界を組み立て」たものではなく、『市政だより』からの抜き書きをもとに歴史を再構成したものなので、民俗学の方法や役割の捉え方によっては、「民俗」の章に含まれるべきではないという考え方もあるだろう。そして、この点が本稿において、なぜわざわざ「民俗誌」に「現代」を付けて「現代民俗誌」を論じるのかという問題に大きく関わってくる。

自身が取り組んだ民俗の章の記述を振り返って、「現代民俗誌」を作成するためには、民俗学独自の方法論にこだわるのではなく、歴史学・社会学・文化人類学等々の方法論や概念を導入して、学際的に対話可能な枠組みを構築していく必要があることを私は実感している。そのことを端的に示すのが、近代（モダニティ）を民俗誌の中にどのように書き込んでいくかという問題である。

（2）モダニティと現代民俗誌

「民俗」というバイアスのかかった言葉を使用すべきかどうか、という根源的な問題は一応カッコに括ることにして、「民俗」と題する章の執筆を引き受けた場合、狭い意味での「民俗」には入らない部分の記述を多く盛り込んでいかなければ「現代民俗誌」は描けないのではないか、という問題が、先の時間軸に沿った時代背景の記述にもあらわれている。そして、それは「近代（モダニティ）」をどのように記述するか、という問題と重なっている。「現代民俗誌」は、モダニティの中にあり、モダニティと格闘し、葛藤している現代の日常生活を記述していく必要があると私は考えている。

その際に、社会学者アンソニー・ギデンズの議論が参考になる。モダニティとは「およそ一七世紀以降のヨーロッパに出現し、その後ほぼ世界中に影響が及んでいった社会生活や社会組織の様式」を指す［ギデンズ 1993: 13］。そして、モダニティにおいて注目すべきは、「時間と空間の分離」（separation of time and space）、「脱埋め込み」（disembedding）、「再帰性」（reflexivity）という 3 つの現象であるとギデンズは指摘している。この 3 つがモダニティに内在する特徴であり、「われわれは、ポスト・モダニティの時代に突入しているのではなく、モダニティのもたらした帰結がこれまで以上に徹底化し、普遍化していく時代に移行しようとしているのである」［ギデンズ 1993: 15］というのがギデンズの主張なのである。

モダニティという様式が「ほぼ世界中に」広がり、現代日本社会もその枠組みの中にあるという認識は、現代民俗誌を記述していく前提として重要であり、それをとおして、現代日本社会に特有のありかたも浮き彫りになってくるものと私は考えている。したがって、『高砂市史』の民俗の章の記述においてもギデンズの枠組みを積極的に活用した。

まず「時間と空間の分離」の例として、1964（昭和 39）年の高砂市政 10 周年記念式典における「獅子舞の公開」を挙げた。『市政だより』1964 年 7 月 1 日号には、「高砂市の郷土芸能として誇り得る北浜町の獅子舞が記念式典会場その他で披露されます」と記され、写真入りで紹介されている。北浜町は 1957 年に新たに高砂市に合併された地域であるが、「それぞれの地元で年中行事として行われてきた郷土芸能が、『高砂市の郷土芸能』という、より広い文脈の中で（つまり、時間と空間を分離して）活用されるようになって」［川森 2016: 693］きたことを示していると私は考えた。

「脱埋め込み」については、1985 年の小学校における「しめ縄づくり」の例を挙げた。『市政だより』1986 年 1 月 5 日号に「しめ縄づくりで／生きた学習」というタイトルで、「12 月 3 日、高齢者チューター制度の指定校となっている阿弥陀小学校で、おじいさんを先生に“しめ縄づくり教室”が開かれました。この高齢者チューター制度とは、地域のお年寄りを先生に、ふるさとの歴史や伝統を体験学習することによって子どもたちの地域への愛着心を養おうというもので、県下で 82 校、市内では、同校が県から指定を受けています」という文章が掲載されている。

ギデンズによれば「脱埋め込み」という概念は「社会関係を相互行為の局所的な脈絡から『引

き離し』、時空間の無限の拡がりのなかに再構築すること」［ギデンズ 1993: 35-36］を意味している。かつては家族･親族･村落等のローカルな人間関係の中に「埋め込まれて」いた民俗事象が、そこから離陸してより広い脈絡において活用されていく状況が、ここに見られるわけである。そして、このような現象を各自の歴史認識の中に位置づけていくためには、1985 年という時間軸を提示する必要があるのではないだろうか。

「再帰性」の例としては、「荒井町ふるさと再発見し隊」という地元の学習グループの活動を「第五節　郷土と民俗の再発見」で取り上げた。2014 年 1 月 29 日付の『神戸新聞』に「住民ら刊行のマップ使い　園児八〇人町内散策」という見出しで、「高砂市荒井町の住民ら（荒井町ふるさと再発見し隊：筆者註）が刊行したガイドマップ『ふるさと宝の地図』を使い、荒井幼稚園・保育園の八〇人が二八日、町内を散策した。荒井神社の石垣に一枚だけ埋め込まれた扇型の竜山石を探すなどし、『探検みたい』と歓声を上げた。（中略）この日、園児らは同神社を出発。郷土史家の故・安井保さんが手掛けた『昭和資料館』を訪れ、昭和の街並みを再現した模型や井戸のつるべを見学した」という記事が掲載された。

この記事に出てくる「郷土史家の故・安井保さん」には私も会い、聞き取り調査をおこなっていたが、私の聞き取り調査と重なる内容が『宝の地図へのみちしるべ』という書物に収録された。「あとがき」には「本冊子は、いわば故安井さんが荒井について皆さんに知っていただきたいと願った内容の集大成と言えるのではないかと思っています」［荒井ふるさと発見し隊編 2014: 90］と記されている。このような場合には、現代民俗誌の記述において、地元の人々が文字化したものを紹介するという手順が必要になるのではないだろうか。また、このマップのようにそれが「再帰的に」活用されていく状況自体を現代民俗誌の対象としなければならないのではないだろうか。

つまり、「インフォーマント→調査者（聞き書き）→記述」という単線的な図式ではなく、「インフォーマント→表象（文字化･映像化等）→調査者→インフォーマント→調査者→現代民俗誌」という、再帰性の具体的なあらわれとしての表象が媒介として入りこんだ複線的なコミュニケーションの図式を踏まえなければ「現代民俗誌」は描けないのではないか、と考えられるのである。

3. 現代市民社会における民俗調査

（1）臨海工業都市としての特徴

臨海工業都市としての高砂の特徴は、どのようなところにあらわれているのだろうか。工場誘致による税収が住民の生活にどのように振り向けられたのだろうか。そして、どのような効果があったのだろうか。そのような視点から、私は「第三節　生活の合理化と生きがいづくり」において「葬式の公営化」を取り上げた。これは、市が棺や葬祭用具を無料で提供・貸し出しをし、霊柩車、マイクロバスの使用料も格安とする制度で、戦後日本社会の生活改善・生活の合理化の流れに対応したものと考えられる。この葬式公営は高砂市の行政においてどのように位置づけられるのだろうか。2000（平成 12）年 9 月の高砂市定例市議会の質問で、ある議員が次のように高砂市の特色を述べた。

高砂市の特色をどう継承し、どう変えるのか。夏の間、行政の方々と改めて勉強や議論をさ

せていただきました。高砂市の特色が幾つか見えてきました。葬式の公営、保育施設、公民館の充実、保育料、国保料など公的な料金が安いこと。スポーツ施設が充実していること。（中略）ある意味で、日本社会の象徴とでも言うべき行政が割合何でもかんでも、直営でやっていく、そういう行政だったと思います。浜を埋め立てて大企業を誘致して、その豊富な財源をそうしたさまざまな上乗せといいますか、追加の行政の施策に注ぎ込んできたわけです。（高砂市議会議事録[7]）

大企業の誘致による臨海工業地帯の形成によって得られた税収が財源となって、葬式公営や公民館の充実などの公共政策が実施されてきたわけである。「葬式公営」は多くの市民に利用されてきたが、近年利用率が急速に低下してきたことと、バブル崩壊以降の長期不況により、財政面からその存続が市議会の議論の俎上に上がるようになってきた。この議員は、先の発言に続いて、「不景気で企業からの税収が落ち込んで、ついに地方交付税の交付団体になった今、どこかを削って、どこかにエネルギーを注がなければならない」状況の中で、葬式公営のあり方をどう考えるのかと市長に問いただしたのである。

民俗学の立場としては、このような公共政策が一人一人の市民レベルにどのように着地しているのかの実態を探り、そのプラス面・マイナス面を生活のレベルから検証していくという課題があるかと思われる。しかし、私の調査はそこまで進まなかった。公共料金等は引っ越さない限り自明のものとして受け取られている側面もあり、むしろ市史におけるこの記述が市民の内省の契機となっていくということを期待する方向で記述をおこなった。

（2）社会教育活動の参与観察

大企業の誘致による税収が財政的基盤になっていると考えられる、その他の活動として、公民館活動と高齢者大学の活動を、同じく第 3 節の「生きがいづくり」の項で取り上げた。社会教育、生涯学習に関わる領域になる。この分野については、政治学者の松下圭一が『社会教育の終焉』という書物を 1986（昭和 61）年に出している。松下はそこで、市民文化活動と社会教育行政は明確に区分されるべきだと主張し、行政が生涯教育・生涯学習に関与することに否定的な見解を示している。たとえば、公民館はムラ的なものを原型としているので、都市型社会が展開し、市民文化活動が広がることによって、その存在意義を失っていくと松下は主張した［松下 1986］。

私の高砂市における公民館活動や高齢者大学の活動の参与観察を踏まえると、一概にそのようにいえるのかどうか、と考えさせられる。この「一概にそういえるかどうか」という疑問を実態に即して考えることが、民俗調査のひとつの重要な意義ではないだろうか。高砂市内には 8 つの公民館があり、年間を通じてさまざまな活動がおこなわれている。それぞれの公民館において「公民館まつり」という発表の場があり、そこで披露するという目標の存在がこれらの活動を促進している。実際に「公民館まつり」に臨席して、その情熱あふれる様子、仲間と息を合わせて相乗効果を生み出す様子に私は感動させられた。このように現場の参与観察からは、松下の指摘のように「その存在意義を失っている」とは思われない。むしろ、このような活動に加わることによって、都市化の中で失われた他者とのつながり（仲間）を形成し、成果の発表会などで自分なりの役割を果たすことによって周囲の人々に貢献できる自分を実感し、その結果として地域社会の中に自分の新たな居場所を確保しているという側面にも注目すべきではないかと私は考える。

一方、1977 年に開設された高齢者大学（通称松陽学園）は、その後順調に発展し、4 学年と OB で構成される体制となっている。入学資格は、高砂市内に在住する満 60 歳以上の者で、募集人員は 130 人、学習内容は「一般教養（必修）」と「クラブ活動」に分かれ、授業料は基本的に無料である。それに加えて、学生自治会と OB 会が合同で自主運営している「三大行事」（運動会、作品展、芸能発表会）への参加が組み込まれている。学生自治会が発行している『松陽学園ニュース』第 12 号（2013 年 2 月）において OB 会長は「学園の狙いは生涯学習ですが、クラブ活動が盛んであり、座学と合わせて生涯活動の場ともなっております。仲間と一緒に学び、そして生涯を通して活動出来る松陽学園を、皆さんと一緒に守り、そして育てていきましょう」と述べている。ここには、高砂市民が行政の提供する制度を自分たちの人生に組み込む形で利用して、生きがいづくりに取り組んでいる様子がよく示されているように思われる。

おわりに

以上のような社会教育活動や「ふるさと再発見」などの再帰的な活動を民俗誌の対象として取り上げていくかどうかというところに、「20 世紀民俗学」の延長線上でその 21 世紀化を目ざすのか、そうではなく「20 世紀民俗学」を乗り越えた、新しい形の「21 世紀民俗学」の形成を目ざすのかの分かれ目があるように私は感じている。このことは、民俗学をどのような学問と考えるか、民俗学の研究対象と目的は何か、という問題に関わっている。

福田アジオは『日本民俗大辞典』において、民俗学とは「世代をこえて伝えられる人びとの集合事象によって生活文化の歴史的展開を明らかにし、それを通して現代の生活文化を説明する学問」と定義している［福田ほか編 2000: 640］。それに対して菅豊は「現代に存在する文化のなかから民俗というものを後生大事に括り取ると、むしろ我々は眼前の文化で捨てているほうが多いのではないですか」［福田・菅・塚原 2012: 45］と反論している。

福田によれば「あくまでも個人の経験や体験を超えたタイムスパンで過去を認識する」手がかりとなる「現代の事象」が民俗学の研究対象ということになる［福田･菅･塚原 2012: 56-57］。一方、私は『高砂市史』の「民俗」の章において、現代社会を生きぬいていくための工夫として活用することができ、今後のよりよき生活を組み立てていくための「内省」の契機として役立つものを、高砂市の人々の日常的実践を手がかりにして探り出そうとした。それらを「民俗」と呼ぶのがよいのかどうかはわからない。ただ、岩本通弥が説くところの柳田国男の視点、即ち「『現代の不思議』という現在の諸問題、今ここに継起する諸事象を解くために、『過去の知識』という歴史と文化の拘束性の視点から、民俗学およびその知識を用いる」［岩本 1998: 26］という視点に近いところに立ち至ったように感じている。そこが新しい形の「21 世紀民俗学」への出発点であり、「現代民俗誌」は現在の問題を解き、未来への道を開くための方法のひとつとして追求されていくべきではないだろうか。

註

(1)　このことは、地域によって状況の違いがあるかもしれない。『「二〇世紀民俗学」を乗り越える』の中で、福田アジオは市町村史民俗編作成における「東高西低」の状況を指摘している［福田・菅・塚原 2012: 141］。

(2)　結果としては、人口 10 万人規模の都市において、このこと自体に無理があったともいえる。都市社会の全体を記述するためには、チームを組んでの調査が必要な面があるが、私自身にチームを組んで調査する経験と技術がなかったこともあり、市史編さん室のメンバーの助けを借りながらも、基本的に単独の調査、そして執筆となった。その限界もあって、刷り上がりで 85 頁という分量の民俗誌となった。結果として、盛り込めなかった項目や情報が多かったことになる。

(3)　岩本通弥は、柳田国男が志向した民俗学は「民俗」を研究するのではなく、「民俗」で研究する学問であったが、戦後日本の民俗学においては「民俗」＝民俗資料というように対象化が進み、「現実社会とは異質の伝承母体という外部を排除した社会の、伝統的価値を見出すものに変質していった」と主張している［岩本 1998］。そのような方向で「民俗」を捉えると、「現代（近代）」と「民俗」は相反するものになり、「現代民俗誌」という言葉自体が自己矛盾を内包することになる。『高砂市史　第七巻』の「民俗」の章および本稿は、一方で「民俗で」研究する方向への回帰を目ざすとともに、現代日本の一般読者が漠然と抱いている「民俗」へのまなざしに揺さぶりを試みたものとして位置づけられる。

(4)　多岐にわたる活動のうち、この 3 つを取り上げたのは、高砂市の特徴を反映していると私が考え、また、聞き取りと参与観察の機会が多く得られたことによる。

(5)　『高砂市史　第七巻』の「第四章　民俗」の構成は、「第一節　「民俗」の捉え方―現代市民にとって民俗とは何か―」、「第二節　戦後高砂社会における生活の変容と民俗」、「第三節　生活の合理化と生きがいづくり」、「第四節　伝統行事と地域社会」、「第五節　郷土と民俗の再発見」である。調査・執筆の機会を与えてくださった高砂市の皆様に感謝したい。

(6)　『市政だより』を資料としたのは、高砂市民レベルでの時代状況の変遷を継続的に追跡していくうえで最適の資料と判断したからである。行政サイドからの発信ではあるが、時間軸を立てるうえで目安となるものを批判的に吟味しながら紹介した。なお、『高砂市史　第三巻　通史編　近現代』「第六章　高度経済成長と高砂」［大森 2014］には包括的な高砂の戦後史の記述があり、事項的には重複する部分もあるが、第 7 巻の「民俗」の章はそれだけで独立して読める記述を目ざしたため、私が民俗学的な視点から必要と考える歴史的な時間軸の提示を試みた。

(7)　高砂市議会平成 12 年 9 月定例会　第 6 日 6 月 30 日（No.111）http://219.122.52.35/kaigiroku/cgi-bin2/ResultFrame.exe?Code=h52lmgenyzsjmkcxck&fileName=H120913A&startPos=0 参照（2017 年 3 月 8 日最終閲覧）。

文献

荒井ふるさと発見し隊編　2014『宝の地図へのみちしるべ』（自刊、平成 25 年度高砂市「夢のシロ」補助金対象事業）

岩本通弥　1998「「民俗」を対象とするから民俗学なのか―なぜ民俗学は「近代」を扱えなくなってしまったのか」『日本民俗学』215

大森　実　2014「第六章　高度経済成長と高砂」高砂市史編さん専門委員会編『高砂市史　第三巻　通史編　近現代』高砂市

川森博司　2016「第四章　民俗」高砂市史編さん専門委員会編『高砂市史　第七巻　別編　文化財・民俗』高砂市

ギデンズ、アンソニー　1993『近代とはいかなる時代か？―モダニティの帰結』（松尾精文・小幡正敏訳）而立書房
クリフォード、ジェイムズ　2003『文化の窮状―二十世紀の民族誌、文学、芸術』（太田好信ほか訳）人文書院
福田アジオ・菅　豊・塚原伸治　2012『「二〇世紀民俗学」を乗り越える―私たちは福田アジオとの討論から何を学ぶか？』岩田書院
福田アジオ　2014「二〇世紀民俗学のこれから」『民俗学のこれまでとこれから』岩田書院
福田アジオほか編　2000『日本民俗大辞典 下』吉川弘文館
松下圭一　1986『社会教育の終焉』筑摩書房
民俗学研究所編　1951『民俗学辞典』東京堂出版